



街路樹



子どもの姿を見取る



不登校児童・生徒を出さないために

教師は、授業中に、どのくらい子どもの姿が見えているでしょうか。

「Aさんはうなずいている」「Bさんはあくびをしている」「Cさんは何か言いたそうにしている」など、適切にとらえていれば、「Bさんに言わせてみてうまく言えないようだったらAさんにフォローさせよう」「Cさんの思いを聞いてみよう」といった次の段階を考えられるはずです。様々な場面をとらえて、できるだけ子どもを観察し、理解しようとする教師の姿勢が大切になってきます。

(1) めあてを提示する場面

めあてをとらえ、見通しを持つことができているかをその表情からとらえるようにします。戸惑いが大きいような場合には、補足説明が必要になってきます。また、新たな視点を与える指示も必要です。

(2) 自力解決の場面

自力解決をしている子どもを見回っていき、つまづいている子どもや間違っている子どもに、助言を与えます。また、考え方が異なる子どもを把握し、話し合いの中で生かすことができるようにします。

(3) ペアやグループでの交流の場面

交流している様子を とらえ、全体に紹介したい考えを交流しているペアやグループを把握します。交流がスムーズにいけないグループを観察し、助言していきます。

(4) 全体交流の場面

発表している子どもに対して、聞き手の子どもが集中しているかを見取ります。伝わっていない場合は、もう一度発表させたり、質問させたり、ペアで説明させてみたりします。

(5) 適用・まとめの場面

ノートにまとめたものの中で、紹介したい子どものノートを見出し、つまづきの傾向を探ったり、次時の指導に生かしたりするために活用します。

<子どもを見取る方法・場面>

- 観察
- ノート
- 発表活動
- 話し合い活動
- 評価規準
- 評価問題
- ワークシート など

これらを授業の各場面で効果的に取り入れ、子どもの姿を的確につかんでいくことが大切です。

「授業をつくる16の視点(県教育センター)」より抜粋

いわき市内の不登校児童・生徒の半数近くが中学3年生です。新たに不登校が出なければ、年々減ってくるわけですが、毎年最終的には200名を超えてしまう状況にあります。不登校になってしまった児童・生徒を復帰させることも大切ですが、新たな不登校を出さないことも非常に重要です。

不登校の原因として最も多いのが「友人関係のトラブル」です。まず担任教師としては、クラスの間関係に敏感になることが大切です。また、中学校では部活動での人間関係のこじれもよくあるので、部活動顧問の役割も重要です。これまでよく話していたのに会話をしなくなったなど、早い段階で変化を察知し教師間・保護者との連携を密にし、適切な対応をする必要があります。

不登校の児童・生徒に共通するのは、「不安」と「葛藤」です。さらに「学校に行きたいけれど行けない」という苦しみを抱えています。このような児童・生徒の苦しみを理解し、解消するためにはその不安や葛藤を聴くことが第一です。不安や葛藤を言葉にして表現することには、カタルシス効果と呼ばれる「心のモヤモヤを解消する」効果があり、この点でも有効です。教師に相談すれば解決しそうだと思えば、児童・生徒は話してきます。そのためには我々は信頼される教師でありたいものです。

すべての児童・生徒が「学校が楽しい」「学校に行けば、友達がいる、先生がいる、勉強ができる」と思えるようになってほしいものです。



第90号をもって今年度の街路樹の発行を終了します。ご愛読ありがとうございました。



教育相談室より ～ 適正就学の結果を考慮して～



平成26年度も終盤を迎えようとしています。世間では、一年のまとめが12月(師走)なら、学校の師走は3月と言えます。

今年度の反省をして、次年度の教育課程編成に向けての作業が始まっているものと思われます。同時に多くの学校では学級編制も視野に入れて、日々の授業や生活指導を行っていくこととなります。今、目の前にいる子どもが、通常学級で学習するのがよいのか、特別支援学級で学習した方がよいのか、特定の教科を小人数の中で指導が受けられないかなど、担任の先生は頭を痛めているのではないのでしょうか。子どもの実態を考慮し、適正就学での話し合いの結果を受けて、特別支援学級入級を保護者に勧めても、なかなか快諾を得られない現状があります。しかし、子どものために、諦めることなく、幾度となく丁寧に話し合うことで、保護者の不安の壁を切り崩すことが出来るのではないのでしょうか。

